

1. 登山記録

K 2 登 攀

戸 高 雅 史

1. 登山隊の名称

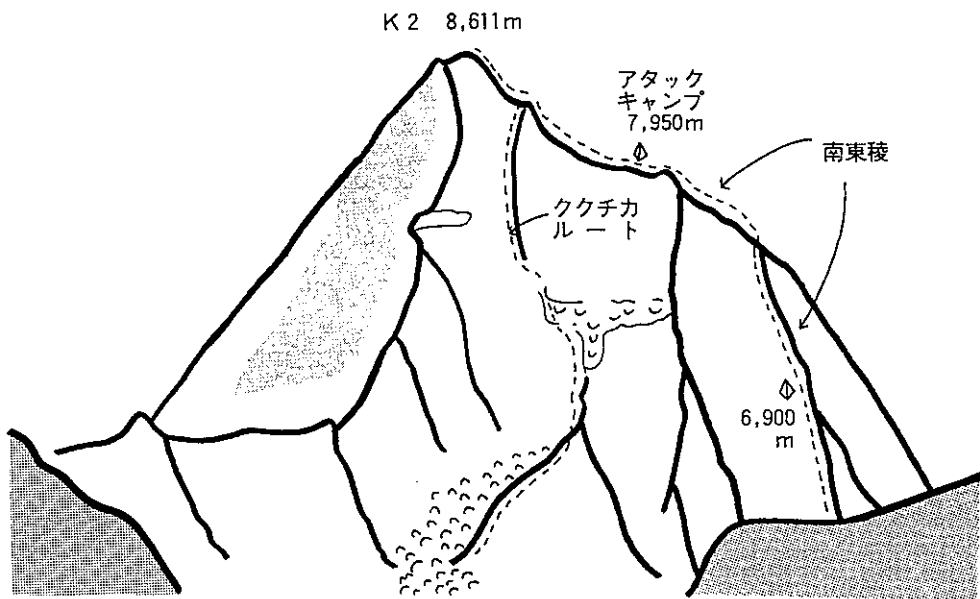
F・O・S K2登山隊1996

2. 目標の山及びルート

K2峰 (8,611m) 南壁ククチカ・ピョトロフスキールートは無酸素・単独・アルパインスタイルにより登攀, 登頂後南東稜を下降

3. 登山結果

南壁を断念し, 南東稜より単独・無酸素にて登頂



K2 南面概念図

4. 登山日程

- 5月13日 日本出発
- 6月6日 K2 BC (5,200m) 到着
- 6月8日 南東稜にて7km以上へ3回到達 (順応と下降ルートの確保のため)
- ～7月4日
- 7月8日 悪天候や上部の不安定な雪のため南壁を断念

1. 登山記録

- 7月9日 南東稜から1回目のアタック (7,950mまで)
～7月11日
- 7月20日 南東稜から2回目のアタック (6,900mまで)
～7月21日
- 7月26日 南東稜から3回目のアタック。29日午後4時20分、登頂
～7月30日
- 7月31日 キャラバン開始
- 8月9日 日本帰着

5. メンバーリスト

- | | | |
|---------------|-------|-----|
| クライマー | 戸高 雅史 | 34歳 |
| ベースキャンプマネージャー | 戸高 優美 | 27歳 |

6. 遠征を振り返って

1995年7月、ブロードピーク縦走を終えBCに下山してきたとき、私は次はK2だとあたかも山が呼んでいるかのような気がしました。「ただひとり在中国。それはすべてとひとつなのではないか。」これは約10年に亘るヒマラヤ遠征を通して私の中で次第に確かになってきた哲学のようなものですが、それを体験を通してもっと深めたいと思っていました。そんな私の想いと孤高の山、K2峰の姿が一つに重なったのかもしれませんが。

ひとりでK2へ……。スタイルはもちろんアルパインスタイルで。

そしてルートは、昔から惹きつけられてきた南壁のククチカ・ピョトロフスキールート。ククチカ・クルティカペアのブロードピーク縦走ができたこと、そして1994年のK2遠征で無酸素で7,400m以上で計六泊し、南東稜8,360mまで到達したことなどで自分にもやれるのではないかと感じていました。この登攀のポイントは高所においてのスピーディーな登攀が要求されること、8,300mでV+の岩登りが出てくること、そして7kmを越えたら簡単には引き返せないこと等でした。

1995年秋のカンチェンジュンガ遠征でさらに高所体験（無酸素で8,400mまで、二度目のアタックは単独で8,350mまで）を重ね、高所でのスピードやソロで登ることの自信を深め、5月13日成田を発ちK2へ向かいました。

当初の予定では6月中に南東稜で順応を終え、さらに下降路の確保（ブラックピラミッドへの下降点に標識をたてることと7,400mから上の大雪壁にコンパスをふっておくこと）をし、7月1日の満月の頃にアタックを行うこととしていました。

しかし、今シーズンのカラコルムヒマラヤは天候が不順でまずスカルドで雨のため10日間待機することになり、結局BCに到着したのは6月6日になってしまいました。6月8日からさっそく南東稜での順応を開始しました。持ってきたロープは全部で300m。内100mはアタック用でしたので、南東稜ではハウスのチムニーとブラックピラミッドの二ヶ所のみフィックスを張り、他はすべてフリーで登

1. 登山記録

り下降は懸垂下降とクライミングダウンを行うこととしました。(今シーズン、K2では私達が最初の隊でした。) 実際には、6,250m(通常のC1)まではフリーで登下降しましたが、そこからブラックピラミッドの上部(7,300m)までは部分的に以前の固定ザイルが使えるところもあり、助かりました。

6月8日から7月4日にかけて順応を行いアタックの準備を整えました。しかし、不安定な天候(7千m以上で常時、強い西風が吹いていたこと。長い悪天など)と、上部の積雪が多くかつ締まっていないこと等から次第に私の中では、南壁へ向かう気持ちは薄れてきていました。南壁を登るなら天候、山のコンディション、自分のフィーリングなどすべてが最高の状態になったときだと考えていました。テクニックや経験を含めて、ソロで南壁に向かうにはまだまだ私の力が足りなかったのかも知れません。ただ、今回の私の一番のテーマは「ひとり、K2にあること」でした。次第にルートに対するこだわりよりも、「ソロであること」を深くみつめてみたいという想いが鮮明になってきました。あらためて今回私がK2にやってきた意味、そして私にとっての登山というものが明らかになったように思います。7月9日に最初のアタックをかけ、最終的には三度目のアタックで7月29日に登頂することができました。

7月29日午前1時20分、7,950mのアタックキャンプを出発。同午後4時20分登頂。30分後下山を開始。同午後7時50分アタックキャンプに到着。翌30日正午頃BCに帰着。K2峰の頂は、静かでやわらかな空気に満ちていました。



K2遠征を通して私は、この山の持つ力強く懐とし

K2山頂にて

たエネルギーに深く包まれていったような気がしています。そこで私は目にみえない、言葉をこえた「何か」と対話をしていたのかもしれませんが。私は、唯一無二のこの「私」に責任がある。内なる声に心を開き、ただあるがままに、生の本質ともいえるこの瞬間を生きたいと思っています。山に限らず、生の全ての領域で……。

(アタックの詳細は「山と渓谷」、「岳人」両誌の1996年10月号参照。)

(アルパインクラブF・O・S代表)

ウルタル 2 峰各面のルートと1996年南稜からの登頂

高橋 堅

山名について

この山塊には一般に『ウルタル』と『ボイオハグール・ドゥアン・アシル』の2つの名称があり、またそれぞれに1峰2峰がつき、しかも1峰2峰の呼び方も入れ替わったりとややこしいので少し整理してみたいと思う。この山塊には7,329mと7,388mの2つの顕著なピーク、そしてその間にある7,350m程度の小さな突起とがある。(今回我々が登ったのは7,388m峰である。)一般に現在日本では7,329m峰を1峰、高いほうの7,388m峰を2峰と呼んでいるが、古い地図では1峰と2峰の呼び名が逆になっているものもある。また1991年のイギリス隊も高いほうを1峰と呼び、その名でパキスタン政府より許可を取っている。イギリスで入手した地図の山名に従ったと言っていた。私の隊が許可を取る際に使ったのは92年からは3回とも1,2をつけずに『ウルタル峰7,388m』の山名である。一方地元では1峰2峰の区別なく一つの山塊として『ウルタル』や『ウルタス』、アルティットの猟師は『タルムシュピーク』(「ピーク」の現地での呼び方は聞き漏らした。)等と呼んでいた。また1994年に7,329m峰に初登頂した広島山岳会隊は『ボイオハグール・ドゥアン・アシル1峰』と言う名称を使っている。前年の朝霧山岳会隊から90年頃までは日本の登山界ではこちらの名称を主に使ったようだ。

そこで私は混乱を避けるため、現地(パキスタン政府ではなくあくまでも麓であるフンザ)で山名が確定するまでは、さしあたって1峰、2峰を使わず、7,329m峰を初登頂の広島山岳会隊が使用した『ドゥアン・アシル(現地ではつなげて『ドゥアナシル』と言うのを聞いた)』とし、7,388m峰(日本ではここ数年ウルタル2峰と呼んでいたピーク)を『ウルタル』と呼んではどうかと思っているが、いかがであろうか。いずれフンザの人々と広島隊に相談してみたいと思っている。が、本稿では読者の混乱を避けるため現在日本で最も一般的になっていると思われる名称、つまり7,329m峰をウルタル1峰、7,388m峰を2峰として使わせていただきたい。

尚、この山塊最高峰の可能性があると一部で思われていた中間のピークは2峰(7,388m)より低く、2峰稜線上の西の肩の小突起でしかないことがわかり、特に名称をつける必要性も残念ながら今のところはない。「残念ながら」と言うのは、実は広島山岳会隊撮影のウルタル1峰頂上からの写真ではこのピークこそ最高峰に見えたので、2峰の初登頂がJAC東海隊によって我々の目の前でなされたからは彼等の登っていないこの真のウルタル主峰(と思っていた!)まで2峰から往復するのが我々の残された楽しみであったからである。

1. ウルタルの概要

「あの山は解が見つからない。」